



Title	ハルトマンの『イーヴァイン』におけるdô-Satzをめぐって
Author(s)	岸川, 良蔵
Citation	独語独文学科研究年報, 10, 49-67
Issue Date	1984-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/25647">https://hdl.handle.net/2115/25647</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P49-67.pdf



# ハルトマンの『イーヴァイン』 における dō-Satz をめぐって

岸 川 良 蔵

## 1. 序

dō-Satz とは、中高ドイツ語の接続詞 dō に導かれた副文をいう。この dō という語は本来は damals という意味の時の副詞であり、この副詞と、同じく中高ドイツ語において場所を表わす副詞である dâ とが、音韻的・意味的類似性によって新高ドイツ語では da という語へと統合されていった。従って、dō-Satz とは基本的には時の副文 (Temporalsatz) である。

この dō-Satz はハルトマン・フォン・アウエの作品にもしばしば登場するものであり、その際、文字通り「……した時」(als) という意味に一応は解されるのであるが、ただこの語は現代ドイツ語の als 以外にも、indem, während, nachdem, weil, そして言うまでもなく da といった意味をも併せ持つものであるため、場合によっては解釈における問題が生じることもある。また、後述するように、実際の詩行におけるこの語の現われ方にもある特徴が認められる。

そこで本稿では、時の副詞 dō をまず基本に据え、それと密接な関係をもつ dō-Satz をめぐる統語論上及び意味論上の問題を、ハルトマンの主要作品 „Iwein“ の詩行に文例を求めて考察してみたい。それがひいては、dō-Satz を含む中高ドイツ語の他の従属文の特徴を知る上での一つの手懸りとなるのではないかと考えるからである。

この問題を取り扱うに際しては、朗読上のさまざまな効果という点も見逃せないため、韻律論上の検討も要求されるところではあろうが、本論ではその方面からの考察を本格的に加えるには至っていない。また、dō と同じ意味であり音の長さのみ異なる do という語形も作品中には見られるが、dō に比べてその現われ方が多くはないので、記述を簡潔にするためこれについては特に言及しないこととする。否定詞 ne との結合形 dōne、人称代名詞との融合形 dōs 等も、同じ理由から本稿では敢えて議論の対象とはしない。なお、他の作品との比較は補足的なものにとどめるため、辞典を明示せぬ用法はすべて „Iwein“ からのものである。文例には本来なら日本語訳を添えるべきではあるが、紙面の都合で割愛することを断わっておく。

## 2. dō の用法概観

dō-Satz を論ずる前に、まず dō という語の変遷について一言触れておきたい。H. Paul によれば、ゴート語において dō に対応する語は、女性・単数・対格の冠詞 þo であろうとされる。<sup>2)</sup>

また、中高ドイツ語に先立つ古高ドイツ語期には、これに対応する tho という語形が見られる。<sup>3)</sup> D. Wunderによれば、古高ドイツ語の作品 Otfrid の Evangelienbuch には、この時の副詞としての tho が全部で 628 回用いられている。<sup>4)</sup> そのうち tho が接続詞として副文を導くいわゆる tho-Satz は、わずかに 77 例であるとされている (全体の 12.3%)。

そのような形態をとっていた dō の中高ドイツ語における用法とそれにかかわる問題を、„Iwein“ を例にとって以下に論じてゆく。この語の現われ方の一例として、次の箇所を見てみよう。

- |                                       |      |
|---------------------------------------|------|
| (1) <u>dō</u> was sīn twelen unlanc   | 992  |
| unz daz er ûf den stein gôz.          |      |
| <u>dô</u> kam ein siusen unde ein dôz | 994  |
| und ein selch weter dar nâch          |      |
| daz in des dûhte daz im ze gâch       |      |
| mit dem giezen wær gewesen:           |      |
| wan er entriute niemer genesen.       |      |
| <u>Dô</u> daz weter ende nam,         | 999  |
| <u>dô</u> hôrter daz geriten kam      | 1000 |
| des selben waldes herre.              | 1001 |

このような形で、作品全体では長音の dō が 353 例認められる。この文例においては、992、994、1000 行目の dō が副詞 (下線を施す)、それに対し 999 行目の dō が接続詞 (二重下線を施す。以下同様) である。先に Otfrid の Evangelienbuch に現われる tho の tho-Satz 形成率を紹介したが、„Iwein“ における 353 の dō のうち接続詞は 136 例に及ぶ (38.5%)。Otfrid に比べ、dô (tho) が接続詞として用いられる割合がかなり高くなっていることがわかる。このことから、古高ドイツ語時代にはまだ比較的、文の構造が単純で、副文を構成するに至ることが少なかったのに対し、中高ドイツ語期、少なくともハルトマンの作品では副文構造がより多用されるようになってきたのではないか、という推測が成り立つ。もとよりこの点には、作品の著者に固有の文体という要素も多く含まれていよう。しかしまた作者の文体も、その時代の言語構造、慣習と無縁ではないであろう。この点については 5 節で再度言及することとし、次に、そもそも dō という語が詩節のどの部分に見られるのかという現象面の問題に触れておく。

先の文例(1)では 999 行目に段落が認められその冒頭に dō が置かれているわけであるが、作品全体に目を通してみて気づくのは、副詞であると接続詞であるとを問わず、このような箇所にはしばしば dō が登場することである。N. Heinz は、このような、節 (Abschnitt) の第 1 番目に

位置する不変化詞に対し Einleitungspartikel (導入の不変化詞) という名称を与え、temporale Partikel (時を表わす不変化詞) dô が、ハルトマンの他の3つの作品 (Gregorius, Erec, Der arme Heinrich) に比較して、„Iwein“ においてはこの位置で使用される率がきわめて高いことを示している。<sup>5)</sup> Heinz は、nû (現代ドイツ語の nun)、dô その他の不変化詞を temporale Partikel と分類し、それらが節の冒頭に置かれている頻度と、「導入の不変化詞」全体に対する率とを挙げている。

	dô	nû
Gr.	21 (20.6%)	21 (20.6%)
Iw.	59 (29.9%)	12 (6.1%)
Er.	24 (10.2%)	40 (17.0%)
AH.	11 (22.9%)	10 (20.8%)

これによれば、dô と並んで時を表わす「導入の不変化詞」 nû は、„Iwein“ においてのみ、その使用率が極端に少ない。それはともかく、副詞としてであれ接統詞としてであれ、段落の冒頭のような導入部分に dô が用いられる比率が高いということは、この語の特徴をさぐる上での一つの手懸りとなるであろう。

### 3. dô-Satz

ここでは、次節において dô-Satz の2つのタイプを述べるための導入として、基本的には時の副文である dô-Satz ははたして時間関係の表示がその主たる機能であるか否かという問題を提起し、併わせてそのさまざまな使用例を見てゆくことにする。

dô-Satz とは本来、 dô という時の副詞の用法を基礎に形成されてきたことを念頭に置きながら、まず以下において、先に述べた136例の dô-Satz を検討してゆく。「導入の不変化詞」としての dô の用法が „Iwein“ において顕著であることは前節で示したが、このことは接統詞の dô についても当てはまり、136例のうち41例が節の冒頭に現われている。<sup>6)</sup>

Dô in der rise komen sach,  
daz was sîn spot, unde sprach 4991-92

Dô in der rîter zürnen sach,  
dô trôster in unde sprach 4593-94

この他： 353, 369, 383, 471, 629 673, 763, 773, 999, 1119, 1301, 1403,  
1483, 1593, 1757, 1783, 2009, 2403, 2763, 3239, 3283, 3467, 3505,  
4011, 4507, 5161, 5699, 5715, 5891, 6471, 6517, 6569, 6639, 6647,  
6737, 6799, 6929, 7291, 7505, 7781。

このような傾向はいったい何を物語るものであろうか。節の改まる箇所では物語の展開上必要な状況の説明としてまず「時」の設定が行なわれる。そのために時の副文である *dô*-Satz が多用される、というのも一つの要因ではあろう。確かに本論の冒頭において筆者は「*dô*-Satz は(中略)文字通り『……した時』 (als) という意味に一応は解される」と述べたし、そのことが *nû* とは異なり過去のある一時点を指し示す *dô* のもつ基本的機能ではある。しかし、*dô* をこのように専ら時間関係のみを重視して把握していく方向は、この語の古高ドイツ語における形態 *tho* の用法を知るにつけても、余りに現代的な捉え方であると言えよう。Wunder によれば *tho*-Satz の基本には、言うまでもなく時間的に確定可能な過去の事象を示す働きが存るわけではあるが、純粋に時間のみを表わすことは *Otfrid* における用法を見る限りむしろ多いとは言えず、どちらかというとならば既知の概念を示して語りを展開させたり、主文に対しての根拠づけとなるような状況を示したり (*weil*)、あるいは手段・方法を示す (*indem*) といった多様な働きが見られるという。すなわち *tho*-Satz とは語りの文脈 (*erzählender Kontext*) に属しており、それを表わす必然性のある場合に時間的方向づけを与えたというのが本来の姿であり、時間的關係を表わすのはむしろ *so* であったとされる。

もとよりこれは、古高ドイツ語の *tho* について述べられる事柄であり、これがそのまま中高ドイツ語の *dô* にも当てはまるというわけではない。しかし先に述べた 136 例の接続詞 *dô* は、現代ドイツ語対訳版<sup>8)</sup> においてその大部分が *als* と訳されているからといって、それらがすべて現代で考えるような時間関係の明示であると解してしまうのには無理があろう。本稿の冒頭に「解釈における問題」と述べたのはこの点についてである。本来ならば „Iwein“ に見られる *dô*-Satz のすべての実例を、このような意味論的観点から文脈をも考慮に入れて分類整理することを試みるべきではあろうが、単に <*dô*=時間> という図式に対する疑念を予示しておくこととし、ここでは、現代ドイツ語においてもはっきりと *als* 以外の接続詞で再現されている幾つかの例を挙げ、上述したような *dô*-Satz のもつ意味の多様性の一端を垣間見るにとどめておく。

現代ドイツ語訳において *als* 以外の接続詞で再現されているのは次の箇所である。

da: 273, 480, 773, 787, 3467, 3788, 7294.  
nachdem: 5899

während: 1301  
kaum: 1757  
wohin: 5858

dô er sweic, do versach ich mich  
daz er ein stumbe wære, 480-81

(Da er schwieg, nahm ich an,  
er sei ein Stummer,)

以下、文例は省略。

なお、5858行目の dô は、疑問副詞 wohin に相当するものであって特殊である。この他、als と訳されてはいるものの、nachdem の意に解すべき箇所には 2763、während の意味に解される箇所としては 1149 がそれぞれ挙げられよう。さらに「理由」を表わしていると思われる dô-Satz としては上述の 480 のほか、

385, 763, 2250, 3766, 4863, 5715, 5699, 5749, 6184, 7294, 7661。

といった箇所が挙げられる。このように、中高ドイツ語においてははっきりと理由、因果関係を表わす dô-Satz の用例はまだ比較的少ないが、この種の語法がその現代ドイツ語における形態である da の接続詞としての意味の萌芽を示しているように思われる。dô は次第に da と、そして後には als と競合関係に入り、やがては完全に駆逐されてしまった<sup>9)</sup> ことが知られている。

この節の最後に、現代ドイツ語では関係文と把握される dô-Satz を見ておく。これらの文例においては当該文の前方にいずれも「時」を表わす語があり、dô-Satz にそれらを内容的に説明する働きが認められることから、dô が関係副詞として作用していると言える。

swie ich dar kam gegangen,  
ichn wart niht wirs enpfangen  
danne ouch des âbents dô ich reit: 785-88

(2) morgen, dô ez tagete,  
dô kam sî wider gegangen 2076-77

この他: 4294, 5082, 5867, 6587。

これら2つの文例から見てとれるのは、従属文である関係文を導いている dô は当初、それに先行する時間規定語を受ける指示詞であったであろうということである。なお、文例(2)においては主文の先頭に、それに先立つ部分との関連を示す副詞 dô が配されている。これは、前置部分と主文との関係を明示する相関詞 (Korrelat, Bezugswort) である。この種の dô 及びそれをめぐる問題点を次の節で検討することにする。

#### 4. dô-Satz の2つのタイプ

この節では、dô-Satz をめぐる2種類の構造を扱ってゆく。2節に掲げた文例(1)に再び注目していただきたい。そこでは、999行目に時の接続詞 dô によって導かれた副文が位置し、その次の行の冒頭に、今度は時の副詞としての dô が再び登場する。副詞の dô は先に述べた相関詞であるとひとまず解釈することにするが、現象としては、前置文の先頭に置かれているのと同じ形態の語が主文の第1位に再度現われるというものである。同様の文構造は例えば次の箇所にも見られる。

dô ich aber im nâher kam  
und ich sîn rehte war genam,  
dô vorht ich in alsô sêre  
sam diu tier, ode mêre. 421-24

dô ich dâ wider ûf gesaz,  
dô was er komen daz er mich sach. 708-09

それに対して、同じく副文が先置されているが、次のような箇所には主文の冒頭に副詞 dô の使用は見られない。

Dô daz diu juncvrouwe ersach,  
sî zôch in wider unde sprach 1483-84

dô er engegen dem tor gienc,  
der schalc in schalclichen enpfienç: 6239-40

このように、前置された副文を受けた形で主文の先頭に dô が現われるか否かにより、次の2つのタイプの文構造が区分される。ここでは仮に、

Typ I: d $\hat{o}$ -Satz を受ける主文の第 1 位を d $\hat{o}$  以外の要素が占める。

Typ II: d $\hat{o}$ -Satz を受ける主文の第 1 位に再び d $\hat{o}$  が置かれる。

と類別することにする。d $\hat{o}$  以外の中高ドイツ語の不変化詞についてもこのような構文上の区別が可能であることは論を俟たない。以下において、„Iwein“に見られる d $\hat{o}$ -Satz 136 例の中から I, II 両タイプの構造を取り出して分類するが、先に述べたように、考察の対象を d $\hat{o}$ -Satz が前置文として配されている構造に限定するので、それが後置文となっている 26 例<sup>10)</sup>は一応考慮の対象外とする。また、当該文が主文にではなくさらに他の副文（例えば daz-Satz）に連なってゆく場合の 7 例<sup>11)</sup>、及び前節の終わりに見た関係副詞としての d $\hat{o}$  6 例、それに先に「特殊である」とした疑問副詞 wohin のような働きをする d $\hat{o}$  1 例（5858）、以上の 40 例はその検討に際して特別の取り扱いを必要とするので、さしあたっては除いて考えることにする。

さて、136 例からこれらの 40 例を引いた残り 96 例を I, II いずれかのタイプに類別してみると次のようになる。

Typ I: 37 例

Typ II: 59 例<sup>12)</sup> (47 例)

この場合、Typ I には、

(3) Er nam daz ors, d $\hat{o}$  erz gewan,  
und vuortez vür den künec dan., 2601-02

のように、d $\hat{o}$ -Satz が詩行の右半分<sup>13)</sup>に位置している構造（他に 4820, 5693, 7722）が、また Typ II には、

D $\hat{o}$  man den wirt begruop, d $\hat{o}$  schiet  
sich diu riuwige diet. 1593-94

のような、当該文が現われるのと同じ詩行の右寄りに主文が配されている構造が、それぞれ含まれている。

(a) それでは、これら 2 つのタイプに差異が認められるとすればそれはどのようなものか、この項

ではまず意味的なレベルで考えてみる。dô-Satzに限らずこの種の2タイプの構文の特徴について、ハルトマンを中心とする中高ドイツ語の作品に文例を求め、かつてF. KargとL. Zatočilとがそれぞれの見解を示している。<sup>13)</sup>以下に両者の議論の要点を紹介し、dô-Satzなる従属文がいかなる条件の下でTyp Iと、あるいはTyp IIと結び付くのかについての考察の端緒としたい。

2人の論文が同じ雑誌の同年号に掲載されていること自体やや奇妙であり、その上、細かな詮索がある意味では非生産的であるという感もぬぐえないが、異なる構造をとっている以上、たとえすべての場合に妥当するような規則性は見出せないにせよ、そこには何らかの要因が認められるはずであるとの考えが両者の出発点であろうし、本稿においてもまずはそのような仮定のもとに論を進めてゆくことにする。

2人の見解は必ずしもすべての面で異なっているというわけではない。出来るだけ整理された形で紹介すると、まず主文の先頭にdôを置かないTyp IはKargによれば、前置文が主文に対して同時性(Gleichzeitigkeit)を示し、副文はその場合さほど重要な情報を伝えるものではなく、心理的重点はむしろ主文の方にあるという場合に用いられる構文であるとされる。それに対してZatočilは、副文の事象が完結して後に主文の内容が描写される場合、すなわち副文に対する主文の後時性(Nachzeitigkeit)を示すのがTyp Iの構文であると主張する。

他方、dôを重ねるTyp IIの構文について、Kargは次のように捉える。すなわちこの場合には、主文が副文に対して後時性を帯びており、dô-Satzで叙述が一旦心理的に完結し、その後の新たな局面を描写するにあたっての区切りの地点にdôが現われ、共に重要な情報である前置文との対比が強調される、との理解である。それに対してZatočilはTyp IIにおいては前置文で述べた事象と主文の内容との同時性、言い換えると副文から主文への物語のなだらかな移行が示されるのだとする。但しこれらは、2人の見解を端的に図式的に描いたに過ぎないが、I、II両タイプの相違を考える上での一つの観点ではある。

ごく概略的に示した両者のこの見解によれば„Iwein“に現われるdô-Satzの解釈がどのようなものになるかを、以下に2、3の例をたどりながら見てゆきたい。

dô suochter wider unde vür  
und envant venster noch tür  
dâ er ûz möchte.  
nu gedâhter waz im tōhte.  
dô er mit selhen sorgen ranc,  
dô wart bî im niht über lanc  
ein tür lîn ûf getân: 1145-51

このあたりの文脈はおおよそ次のようなものである。幽閉の身となったイーヴァインは、脱出できそうな窓も扉も見出せぬ状態ではあるがなおもなんとかして逃れ出ようと思いをめぐらしている。と、その時、突然扉が開いて女官ルーネテが入ってくる……。

Zatočil は、この文例のような Typ II による構造にも同時性を見てとるわけであるが、彼によれば「彼がそのような不安と闘っているうちに」の如く während の意味で接続詞 *dô* が解される。ところが Typ II を後時性を表わす構文だとする Karg によるとこの箇所は、同じ事象ではあっても少々異なる把握となる。局面打開の方途を見出せずにいるイーヴァインが城壁に囲まれた空間にいて、そこで一つの状況が半ば終止し、あたかも息をひそめた後に後段の „*dô wart...*“ に始まる主文において新たな展開が見られる、と。Karg は一貫して、語りに起伏を読み取るこのような心理的把握を行なうわけで、これによると、等しい価値をもった 2 つの部分から成る、いわば 2 つの峰をもつ従属的複合文 (Satzgefüge) という構文理解が生まれる。

さらに 1 例、両者の解釈が心理のレベルで微妙な違いを見せる箇所を挙げておく。

<u>Dô</u> disiu grôze clage geschach,	4011
daz gehôrte unde sach	
ein juncvrouwe, diu leit	
von vorhten grœzer arbeit	
danne ie dehein wîp,	
wand sî gevangen ûf den lîp	
in der kapellen lac.	
und <u>dô</u> er dirre clage pflac,	4018
<u>dô</u> sach sî hin vür	
durch eine schründen an der tür.	4020

この箇所は、妻を失ったイーヴァインが悲嘆に暮れている折、礼拝堂に閉じ込められているルーネテという乙女がそれに気づき扉の裂け目から覗く、という文脈中にある。

Zatočil によるとこの最後の 3 行は、「彼はこの嘆きを抱く」という行為 (前置文) と「彼女は扉の裂け目からそれを見た」という行為 (後続の主文) とが同時性をもって parallel に進行するものであると捉えられる。これもやはり、現代ドイツ語の während で表わされる関係に両者があるとする解釈である。と同時に彼によれば、4018 行目以降は 4011 行目で述べたことの Wiederholung であるとされる。これに対して Karg の見解では、ハルトマンのように文体上の技巧に秀でた作者がそう多くない詩行の間で同じことを繰り返して述べたりはしまいとの前提に立

ち、4018行目以下を「イーヴァインが嘆きを抱いた<sup>14)</sup>後で、ルーネテが扉の隙間から覗いた」と、nachdemによって再現しようとする。彼によればこのTyp IIの構文は基本的には、先に述べたようにあくまでも、しばし間を置いて後の局面転換を示すものであり、当然この4019行目以降にそれがなされるとの解釈に至る。

以上に述べたのは、Typ IIにおいて主文が常に後時性を表示するものか、あるいは同時性を表わすものなのかという点に関する2人の見解の相違である。しかしながら、この項に挙げた観点ですべてのTyp IIにおけるdôが説明されるわけではむろんない。また、両者が互いに自己の土俵で論じようとしているためであろう、議論が必ずしもかみ合わず、一枚の紙を表と裏から眺めるような対立であるとの印象も否めない。そこで次項においては、これら2つのタイプの構造に見られる統語論上の特徴に視点を移して考察してゆくことにする。

(b) Typ Iとは主文<sup>14)</sup>の第1位をdô以外の語が占める構造であるが、では実際にはどのような要素がそこに現われるのであろうか。次にこの点から見てゆく。但し、本節の導入部に掲げた文例(3)のような構造にはこの検討はなじまないように思われるので、その4例は扱わないことにする。Typ Iにおける主文の第1位を占める要素を品詞別に挙げると以下のようになる。<sup>15)</sup>

(4) 冠詞:	4	{	定冠詞: 3 (der: 2, den: 1)
		{	不定冠詞: 1 (einen)
代名詞:	16	{	人称代名詞: 6 (ich: 1, er: 2, si: 3)
		{	指示代名詞: 10 $\left( \begin{array}{l} \text{daz} \left\{ \begin{array}{l} (1 \text{ 格}: 5) \\ (4 \text{ 格}: 2) \end{array} \right. \\ \text{des} \ (2 \text{ 格}: 3) \end{array} \right)$
副詞:	8	(	nû: 3, vil: 2, männeclîch, noch, zehant: 各1)
前置詞:	3		(von: 2, wider: 1)
接続詞:	2		(unde, weder)

männeclîch という副詞を除けばこれらはすべて単音節かせいぜい2音節の短い語であることに、まず注意を留めておきたい。

さて、この表を見てわかるように、Typ Iにおける主文の第1位に名詞あるいは動詞が置かれている箇所は1例も存在しない。それでは、この構造をとる場合には定動詞はどこに位置しているのであろうか。(4)に示された33例を主文の定動詞の位置によって分類してみると、下記(5)群に

掲げる 9 例以外はすべて定動詞が第 2 位にあることが判明する。<sup>16)</sup>

(5)der (wirt)	(3 5 3)
der (schalc)	(6 2 3 9)
einen (stîc)	(2 7 3)
vil (drâte)	(3 4 8 7)
vil (tiure)	(6 8 5 8)
männeclîch	(6 2)
wider (sich)	(3 5 0 5)
von (rehte)	(2 4 0 3, 2 4 0 5)

上記の語が主文の先頭に立つ場合はいずれも、定動詞が詩行の末尾に位置している。

Dô ich mit ir ze tische gienc,  
der\_wirt mich anderstunt enpfienç. 353-54

しかしこれは、定動詞後置などといった現象ではなく、すべてその前後いずれかの詩行と脚韻を踏むという韻律上の要請によるものと解される。また、より有力な要因としては次のことが考えられる。すなわち、上記 (5) 群の語を見ると、männeclîch は 3 音節であるし、その他も<冠詞+名詞>、<副詞+形容詞(あるいは副詞)>、<前置詞+名詞>という形で結合して初めて一つの文成分とみなされるもので、その場合には当然 2 音節以上の音価を示すものであることがわかる。そのような要素が詩行の先頭部分を占める限り、定動詞はおのずから第 2 位には立ちにくい事情が生じるわけである。これに対し、人称代名詞や指示代名詞、単独で用いられる副詞などはいずれも独立して一つの文成分となり得る要素であり、その場合にはすべて定動詞が第 2 位を占めるのが容易となるものと思われる。

Dô er des lange gepflac,  
er lief umb einen mitten tac  
an ein niuweriute. 3283-85

一方、Typ II の構造がとられる場合は、59 例のすべてにおいて定動詞は第 2 位にある。

dô er noch lützel hete geseit,  
dô erwachte diu künegin  
 unde hörte sîn sagen hin in.      96-98

もとより、現代ドイツ語の「叙述文における定動詞第2位」の原則は中高ドイツ語にあっては未だ確立されていないわけであるが、総体的には第2位に置かれる傾向が一般化していたであろうことが窺える。

以上のことから次のような推測が成り立つのではないか。まず、前置文である dô-Satz 内で語られる事象は、それに先行する部分で述べられたかあるいはそれと関係する、いわば既知の情報である。<sup>17)</sup> これを受ける主文では、語りの展開上必要な何らかの未知の情報を述べてゆかねばならない。とりわけ動詞は、受け手に対して明瞭に伝えられねばならない。その際、いきなり動詞を先頭に立てることは効果的ではない。さりとて第1位を空位にするわけにはゆかないので、先行する詩行の冒頭に接続詞として用いられたばかりの dô をいわば填詞として再び文頭に立てて語調を整え、それにより新たに登場する概念の受け手へのより良い浸透を図る。

この推測に立てば、前項 (a) で見た同時性あるいは後時性といった時間関係の表示という要素は乏しく、3節に予示した < dô = 時間 > の図式に対する疑念がいっそう顕著なものとなってくる。むしろ dô とは、単に「漠然とした状況」を表わし、前件をまとめ次の事柄を引き出すための先駆ないしは導入的な機能を果たすものであると言えよう。<sup>18)</sup> このような、伝達上の高い価値をもたぬ語が統語的にも影の薄い存在となるのは当然の成り行きであり、ここに省略の問題が生ずる。この項の冒頭の記述を思い起こすときこの問題は、代名詞や単独の副詞が主文の先頭を占めると dô はこの位置をそれらに譲って自らは消滅するという現象として浮かび上がってくる。

dô sî alsô stille sweic,  
 daz begund im starke swâren,      2250-51

Dô diu juncvrouwe gereit,  
 nû was dem kûnege starke leit  
 hern Îweines swære,      3239-41

ここで気づくのは、この現象が現代ドイツ語のいわゆる「文法上の主語」という項目において語られることの多い事情に一種似通ったものであるということである。Es war ein König in Thule. (Goethe)の如きがその典型的な文であるが、もちろんこの語法は巨匠の名句に限らず現代ドイツ語においてもある条件の下に広く見られるもので、一般には、全く意味のない主語 es が

後続する主語の先駆として文の第1位を占めた構文である、という基本的解説がなされる。これは新しく登場させる事物を強調するための構文であり、強調したい要素を文頭に立てるのではなく、後方に置くことによって却って印象を強めることが眼目であるとされる。そして、現代ドイツ語では「平叙文における定動詞第2位」の原則により、強調したい要素は第3位以降の文域 (Satzfeld) に置かれるわけであるため、空位の前域 (Vorfeld) に立てられるのが形式上の主語 es である。この語法は事物の存在、あるいは一步進んで新たな対象の生起を告げたりする場合に、それらへの注意を喚起する目的をもって使用される。いわば行為の主体よりも行為そのもの、すなわち状況あるいは現象に重きを置く表現であるため、物語の冒頭にしばしば用いられる。

本稿で論じている問題とこの点とを考え合わせると、「文法上の主語」 es が物語の冒頭によく見られるというのは、3節で見たように節の始まりの箇所にも d<sup>o</sup> が現われる例が多いということに一脈通ずるものがあるように思えてくる。このように見ると、先に「相関詞であるとひとまず解釈する」としてきた Typ II における副詞 d<sup>o</sup> はきわめて形式的な語であり、省略の問題もからみ統語論的にも軽い価値しかもたぬ語であるということが窺われる。とはいえ、全く有形無意な語であるとも言えず、強いて特徴づけるならば「漠然とした状況」を表わし、やはり3節冒頭で古高ドイツ語 tho の機能に触れて述べたように「既知の概念を示して語りを展開させ」る働きがあると言えるであろう。

以上、Typ I, II それぞれの構造が使用される背景にあると思われる統語論上の要因を論じてきた。さらに、副詞 d<sup>o</sup> を要求する Typ II の構文が「状況あるいは現象に重きを置く表現である」という点に関し、次項に若干の補足を行なう。

(c) この項では、Typ I, II の問題に、d<sup>o</sup> を含む文に使用される動詞の種類がどうかかわるかについて補足的検討を試みる。この両タイプに用いられているすべての動詞の分類整理が本来ならば優先されねばならないが、ここでは d<sup>o</sup> と werden との関連というほんの一例を示すにとどめざるを得ない。<sup>20)</sup>

„Iwein“ には、werden を定動詞とする主文に d<sup>o</sup> の現われる文例が次の通り見出される。

d <sup>o</sup> wart daz weter als <sup>o</sup> gr <sup>o</sup> z	
daz alle die d <sup>a</sup> verdr <sup>o</sup> z	
die dar komen w <sup>a</sup> ren:	2537-39
⋮	
d <sup>o</sup> wart dem hern Iwein g <sup>a</sup> ch	
gew <sup>a</sup> fent von der veste;	2542-43

この他：385, 1149, 3231, 3596, 3933, 4138, 4262, 4372, 5412。

そしてこのうちの4例（下線を施したもの）が、前置文としての  $d\hat{o}$ -Satz を伴ういわゆる Typ II の構文をなすものである。

und  $d\hat{o}$  ich niene wolde  
noch belîben solde,  
 $d\hat{o}$  wart der rîterlîchen maget  
von mir gnâde gesaget  
ir guoten handelunge.                      385-89

それに対し、 $d\hat{o}$ -Satz を受ける主文の定動詞に werden が用いられ且つ Typ I をなす文例は次の1箇所のみである。

$d\hat{o}$  sî sich alsus versprach                      7661  
und unrehtes selbe jach,  
des wart Artûs der künec vrô:                      7663

Typ I : Typ II = 1 : 4 である。ただ、前項で述べた事柄ともかかわるが、Typ I の1例は形容詞 vrô の目的語である des を、前置文との関連を明示するために主文の第1位に置いたことによる  $d\hat{o}$  の消滅と考えて差しつかえなからう。

そもそも werden とは、行為者ではなく行為それ自体の生起に焦点を合わせた動詞であり、受動態形成に際して助動詞となり得るのもこの特性に起因する。他方、前項で述べたように、 $d\hat{o}$  を伴う Typ II の構文が「状況あるいは現象に重きを置く表現である」との規定を考え合わせるならば、提示した文例は必ずしも十分ではないが、Typ II と werden との関連性は決して偶然とは言えぬものを含んでいるとみなせるであろう。

## 5. 首語句反復

これまでに、 $d\hat{o}$ -Satz の2つのタイプの現われをめぐる問題を主として意味論的・統語論的に見てきた。従って当該文に関する文法的考察は前節までとする。ただ2節に示唆したように、語り手である著者の存在を無視することはできず、最終的には文体の問題に帰せられる部分が多い。事実、前置文と主文との関係を完結とみるか継続とみるかという先の議論も結局は、要所に力点を

加える文体とみるか淡々とした文体とみるかの問題とも言える。

<dô = 時間> という図式が絶対的なものではないということは既に示されてきたが、その後には次のような事情が想定できる。現在でこそ同時性、先時性、後時性といった時間関係を表示する接続詞が発達しているが、中高ドイツ語期には今日のような細分化は見られず、ある事象と事象の間の時間関係はそれが過去に関するものであるなら一様に dô で考えられてきた。ただこの語の形成する語野がおのずと広い範囲にわたるため、時間概念のみならず語りの中の「漠然とした状況」をも表わし得た。それが作者の心理に応じて文体上の手段に用いられてゆく、というものである。

こういう事情を念頭に置いた上でこの節では、いわゆる Typ II の構文がハルトマンに特徴的な文体であるとの見解を紹介したい。一般に、上下に相連続した幾つかの詩行の第1位に全く同じ語が並んで現われることはハルトマンの作品にしばしば見られるもので、この現象は「首語句反復」と呼ばれ、その文体上の効果としては描写を生き生きとしたものにする点が挙げられる。<sup>21)</sup> 同音連続という点で特徴的なものに次の箇所がある。

dise sprâchen wider diu wîp,  
dise banecten den lîp,  
dise tanzten, dise sungen,  
dise liefen, dise sprungen,  
dise hôrten seitspil,  
dise schuzzen zuo dem zil,  
dise redten von seneder arbeit,  
dise von grôzer manheit.                      65-72

er sprach: 'diz ist des ich ie bat,  
daz mich got bræhte ûf die stat  
daz mir sô wol geschæhe  
daz ich mit vreuden sæhe  
mîne liebe muoter.                      Gr. 2609-13

このような、詩行の第1位に置かれた同じ語句は、たとえそれらが異なる意味をもつものであっても特別の効果をもっていると見られる。<sup>22)</sup> そしてさらに、「物語の特に重要な箇所を強調するためにもこの首語句反復を用いる<sup>23)</sup>」場合があり、前節(a)におけるKargとZatočilの議論にも関連

する次の箇所が挙げられる。

Dô sî sich missetrôste  
daz sî nû nieman lôste,  
dô kam ir helfære, 5161-63

ここはまさに物語の重要な箇所である。ルーネテは閉じ込められていた礼拝堂から出され今にも火炎の刑に処せられようとしている。にもかかわらず、彼女のために戦うはずの騎士イーヴァインはまだ到着していない。もはやこれまでかと諦めかけたまさにその時、救いの騎士が彼女のもとにやって来る……。前置文における絶望状況とそれに続く主文での救いの主の登場とが、鮮やかな対比をなして描かれている。このように、描写を平板なものではなく生き生きとしたものにするために首語句反復としての *dô* ——, *dô* が用いられるとする理解は先に見た Karg の見解により近いものであろうが、但し同時性、後時性といった問題はこの際重要性を失っていると判断される。

このように見てくると、首語句反復をもつ Typ II の構文は、強い印象づけが期待される同音反復によって、描写にアクセントを加えるべき箇所、受け手に対する強調効果をねらって用いられることの多い文体上の一手段と言える。場面の急迫が見られる次のような箇所にこのタイプが使用されている。

421, 752, 1224, 1478, 1599, 1783, 3766, 3865, 4018, 4258,  
4611, 5046, 5060, 5161。

## 6. おわりに

以上、除外した例も多く必ずしも網羅的記述を行なうことはできなかったが、Typ I, II という構造を支配する要因をさぐることを中心に *dô*-Satz の特徴を考察してきた。その要因はむしろ一つではあり得ないわけであるが、まず、相関詞 *dô* が専ら時間関係のみを表示するものであるとの把握は、その適用がかなり限定されるべきものであり、むしろこの語は接続詞であると副詞であると問わず、漠然とした状況、ないしは現象が発生する環境を表わすものであると言えよう。なおこの点に関しては、中世における時間概念の考察も必要となろう。そして、Typ II を形成する副詞 *dô* は、描写に力点を加える箇所での首語句反復の一環として登場するということがかなりの妥当性を有している反面、単なる韻律上の調整機能 (Auftakt) をもつにしかすぎない形式的な語である場合も多々あるであろうことも、主文における定動詞の位置との関連から推測される。いずれにしてもこの Typ II の *dô* が *dô*-Satz そのものと密接な関係をもつものであり、ハルトマンの作

品における他の従属文の特徴を知る上での一つの手懸りとなるように思われる。なお本論では、実例のより詳細な検討、また通時論的考察などに不十分な点を残すが、それらは筆者の今後の課題となるであろう。

## 註

- 1) 短音の do は全編に 36 回現われる。86, 108, 295, 384, 418, 480, 638, 753, 1062, 1194, 1196, 1271, 1407, 1731, 1758, 1836, 2011, 2188, 2218, 2255, 2371, 2765, 3020, 3368, 3537, 3673, 3805, 5050, 5232, 5625, 5740, 6008, 6088, 6445, 6710, 7733。
- 2) H. Paul : Deutsches Wörterbuch, 7., durchgesehene Aufl., Tübingen 1969. S.122.
- 3) U. Gerdes, G. Spellerberg: Althochdeutsch – Mittelhochdeutsch, 4. Aufl., Athenäum Verlag 1978. S.84.
- 4) D. Wunder : Der Nebensatz bei Otfrid, Heidelberg 1965. S.41. この書は、中高ドイツ語の従属文の特徴を知る上からも示唆を受けるところが大きい。本稿において以下に折にふれて言及するであろう tho 及び tho-Satz に関する事柄は、同書の記述を参照してのものである。
- 5) N. Heinz: Zur Gliederungstechnik Hartmanns von Aue, Göppingen 1973. 但し、段落のつけ方については、筆者の使用したテキストと違う版に依拠した場合には若干の差異が生じることは言うまでもない。
- 6) 段落の確定については、本稿での使用テキストに基づくこととする。
- 7) D. Wunder: 前掲書 S.49 を参照。
- 8) 本稿では、Iwein, Text der 7. Aufl. von G. F. Benecke, K. Lachmann und L. Wolff, Übersetzung und Anmerkungen von Th. Cramer, Berlin 1968. を参照した。
- 9) O. Behagel: Deutsche Syntax, 4 Bde., Heidelberg. Band 3. S.108.
- 10) 313, 330, 608, 711, 1111, 1363, 2222, 2461, 2558, 2560, 2590, 2920, 3144, 3440, 3666, 3717, 3788, 4863, 5899, 6184, 6300, 6868, 7945, 7952, 7999, 8098. 5082 は関係副詞の項に数え入れる。なお „Iwein“ には、nû—, dô-Satz 等の構造 (例えば 3716-17) はあるが、相関詞 dô が先に立ち、続く詩行に dô-

Satzが現われる、後方指示先行型ともいうべき d<sup>h</sup> は見られない。

- 11) 1701, 3121, 3888, 4946, 5044, 5857, 7126。
- 12) このうちの12例は、短音の do または done と結び付くものである。従って厳密には、d<sup>h</sup> ——, d<sup>h</sup> という同音反復は47例ということになる。
- 13) L. Zatočil: Zur Hypotaxe bei Hartmann von Aue I, in: PBB (Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur) 56, 1932, S. 382-398.  
F. Karg: Zur Hypotaxe bei Hartmann von Aue II, in: PBB 56, S. 399-413.  
先に示した Typ I, II の類別は、この2人が行なった区分に従ったものであった。この項における以下の記述は、おおむねこれらの論文中の当該箇所の論旨に沿ったものである。
- 14) 主文が複数見出せる箇所も当然あり得るが、ここでは、d<sup>h</sup>-Satz に続いて一番先に現われるもの1文のみをその対象とする。
- 15) 各語の現われる箇所は次のとおり。但し数字は、前置文たる d<sup>h</sup>-Satz の現われる詩行を示す。以下同様。

der (1格) : 353, 6239; den (4格) : 5812;

einen (4格) : 273;

ich: 673; er: 3283, 5771;

sî: 1217, 1365, 1483;

daz (1格) : 2250, 4507, 4991, 5184, 7291;

(4格) : 904, 4011;

des (2格) : 369, 7505, 7661;

nû: 1301, 3239, 3467 (3467は nûne);

vil: 3487, 6858; mænneclîch: 62;

noch: 7781; zehant: 471;

von: 2403, 2405; wider: 3505;

unde: 773; weder: 2248。

- 16) weder (2248) の場合は、離接的接続詞としての weder ~ noch ~ という構造がからむため、特別に考える必要がある。
- 17) この点に関する限りは、前項の Zatočil の考えに近い。
- 18) 因みに Otfried の tho-Satz について Wunder は、「tho-Satz 自体は内容としての時間的な規定を行なうことは稀で、大部分はある既知の事柄を指し示す」と論じている (D. Wunder: 前掲書 S. 51)。

- 19) Behagel は、「do を伴った文は事実の生起 (eintretende Tatsache) を示すとの説をなしている (O. Behagel: 前掲書 S. 102)。
- 20) これについては次の論文より示唆を与えられた。荻野蔵平『行為表現と現象表現 — 中高ドイツ語の werden について—』(『エネルギー』7号、朝日出版社、1980年。72～82頁)。この論文においては、言語表現一般が、行為者を主語として述べる「する型」の「行為表現」(Tätigkeitsausdruck) と行為それ自体に注意を向ける「起こる」型の「現象表現」(Geschehnisausdruck) とに大別され、後者の表現のための代表的な動詞として中高ドイツ語の werden と geschehen が挙げられている。
- 21) 赤井慧爾『ハルトマン研究 — 「イーヴァイン」の文体を中心に—』朝日出版社、1981年。163頁を参照。
- 22) 同書、164頁。
- 23) 同書、169頁。

## 参 考 文 献

### 1) テキスト

Hartmann von Aue: Iwein, hrsg. von G. F. Benecke und K. Lachmann, neubearbeitet von L. Wolff, 7. Aufl., Berlin 1968.

— Gregorius, hrsg. von H. Paul, 12. Aufl., besorgt von L. Wolff, Altddeutsche Textbibliothek Nr. 2, Tübingen 1973.

### 2) 文法書、辞書、その他 (〔註〕に挙げたもの以外)

I. Dal: Kurze deutsche Syntax, 3., verbesserte Aufl., Tübingen 1966.

Duden-Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, bearbeitet von P.

Grebe, 3. Aufl., Mannheim 1973. (=Der große Duden, Band 4)

W. Jung: Grammatik der deutschen Sprache, Leipzig 1973.

H. Paul/H. Moser/I. Schröbler/S. Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik, 22., durchgesehene Aufl., Tübingen 1982.

K. Weinhold: Mittelhochdeutsche Grammatik, 2. Ausgabe, Paderborn 1967.

G. F. Benecke: Wörterbuch zu Hartmanns Iwein, 2. Ausgabe, besorgt von E. Wilken, Wiesbaden, 1965.

M. Lexer: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, 3 Bde., Stuttgart 1979.

F. Tschirch: Geschichte der deutschen Sprache, 2 Bde. 2., verbesserte und vermehrte Aufl., Berlin 1969.

(大学院博士課程)